

(別紙)

天候不順に対する農作物の栽培管理について

令和8年(2026年)年9月7日
農 業 技 術 課

1 作 物

(1) 水 稲

- ・刈り遅れによる品質低下が懸念されるため、収穫適期となっているほ場では出来るだけ早く収穫作業を行う。倒伏した場所では、穂発芽の有無を確認し、発生している場合は刈り分けを行う。
- ・コンバイン利用の場合、籾水分を確認して 25%を下回っていれば、曇天であっても収穫作業を行う。
- ・バインダー刈り架干しの場合は、ハゼシート等を利用して降雨にあわせないようにする。なお、ハゼ全体を覆うシートの場合、晴天時には裾をめくって通風をよくし、ムレを防ぐ。

(2) 大 豆

- ・滞水しているほ場では排水対策を行う。
- ・長雨が続きと紫斑病の発生が多くなるので薬剤防除を行う。なお、薬剤散布は使用基準を厳守して行う。また、収穫が遅れると発病が多くなるので適期収穫を行う。

(3) そ ば

- ・湿害防止や収穫作業に支障が出ないように排水対策を行っておく。

2 果 樹

(1) 共 通

- ・受光態勢改善のため、支柱立て、枝つり、徒長枝切り等を行う。
- ・降雨により園内が滞水しないように、雨水の流入防止及び排水対策を行う。

(2) りんご

ア 一般管理

- ・現状では成熟が平年並みからやや早めに推移している。これから収穫を迎える品種は、着色とともに果実成熟状況の双方に留意しながら、適期収穫に留意する。
- ・適期に着色管理を行い、品質向上を図る。
- ・落果防止剤の散布は、成熟に応じて適期散布に心がける。

イ 防除

- ・今後も降雨が多いと、すす斑病、すす点病の発生が懸念されるので、適正な間隔での防除を励行し、防除徹底を図る。
- ・春季に黒星病の発生が多かった園地では、翌年の伝染源となる秋季感染防止のため、降雨が続く場合には殺菌剤を散布する。

(3) ぶどう

- ・果粒肥大は良好で、成熟も早めである。
- ・収穫は、品種ごとに十分に成熟した果実を収穫・出荷する。脱粒の心配がある品種は、収穫が遅れないようにする。
- ・荷造り時には、病害虫果や障害果(裂果など)の除去に注意する。
- ・醸造用ぶどうでは、収穫が遅れると果房腐敗の危険性が高まるので、適期収穫に努める。

(4) な し

ア 一般管理

- ・これから収穫を迎える品種は、熟度の進行に十分留意し、収穫が遅れないようにする。

イ 防除

- ・西洋なしの無袋栽培品種で収穫まで期間がある場合は、輪紋病対策として殺菌剤を散布する。

(5) も も

ア 一般管理

- ・樹勢が強い樹では、下枝まで十分光が入るよう秋季せん定を行う。なお、秋季せん定の程度は、凍害防止のため新梢切除率で3割程度を上限とする。

イ 防除

- ・せん孔細菌病発生園では、越冬伝染源対策として10月上旬頃までボルドー液を散布する。

3 野 菜

(1) レタス類

- ・曇天・降雨により、軟腐病、斑点細菌病、腐敗病、菌核病、べと病等各種病害の発生が今後心配されるので防除を徹底する。また、排水対策を講じて栽培環境の改善を図る。
- ・細菌性病害は、生育ステージに応じて、銅剤、オキシリニック酸混合剤、抗生物質剤を防除基準を参考に散布する。
- ・菌類病対策は、生育ステージに応じて防除基準を参考に散布する。
- ・チップバーンの発生予防としてカルシウム剤の葉面散布を行う。

(2) はくさい

- ・黒斑細菌病、べと病、ピシウム腐敗病等の拡大が心配されるので、予防防除を行う。
- ・細菌性病害は、生育ステージに応じて、銅剤、オキシリニック酸混合剤及び抗生物質剤を防除基準を参考に散布する。
- ・菌類病対策は、生育ステージに応じて、防除基準を参考に散布する。

(3) キャベツ

- ・黒腐病、軟腐病、黒斑細菌病等の拡大が心配されるので、予防防除を行う。
- ・細菌性病害は、生育ステージに応じて、銅剤、オキシリニック酸混合剤、抗生物質剤を防除基準を参考に散布する。

(4) アスパラガス

- ・茎枯病、斑点病及び褐斑病の発生が拡大傾向にあるので、防除基準を参考に散布する。

(5) 果菜類（施設）

- ・ハウス内気温調節に使用している内張り資材は、適正に使用し光量確保に努める。
- ・きゅうりでは、うどんこ病、べと病、褐斑病、炭疽病等の拡大が心配されるので、防除基準を参考に防除を行う。
- ・きゅうり及びイチゴでは、曇天後の強日射により葉やけ等が発生するので注意する。

4 花 き

(1) 日照量の確保

- ・カーネーション、トルコギキョウなど施設花きでは、夏の高温強日射対策のために遮光資材を展開している事例もあるが、今後日照不足が続く場合は花蕾不足などの品質低下や開花遅延も心配されるため、遮光資材の扱い（外部遮光では外す、内部遮光ではまとめる）を検討し、施設内部に日光が十分入るように配慮する。
- ・遮光資材を外す際は、日照不足により生育が軟弱になっており、日差しが戻ると葉焼けしやすい。このため曇天日に外すか日差しのある日は夕方に外し、弱い日光に必ず当てて慣らしておく。

(2) 施設の換気と温度管理

- ・9月に入り気温が低下する中での日照不足は、ブラスチング（蕾の生育停止）による花蕾不足、軟弱などの品質低下や開花の遅延も心配されるため、保温や加温についても考慮する。

・灰色かび病など低温多湿条件下で発生する病害に注意し、循環扇や換気扇を使用するとともに、各品目の生育ステージに合った温度を考慮した暖房機による加温も想定しておく。また、循環扇等がないハウスでは、天窓や側窓等をできる限り開放して換気の徹底を図る。

(3) 一般管理

- ・トルコギキョウでは、日照不足の影響によりブラッシング（蕾の生育停止）の発生が多くなる。このため品質低下を防止するため、可能な範囲で不要な二次花蕾の整理を徹底する。
- ・カーネーションは、特にスプレー系品種は、日照不足の影響から輪数不足や軟弱化となりやすい。株元まで光と風が届くよう、不要な芽や側枝を整理する。
- ・アルストロメリアは、茎葉管理を徹底して株元まで光が届くよう、適切な立茎数となるよう茎の間引きを徹底する。
- ・露地栽培のきくや他の露地品目では、排水不良による根腐れなどが心配されるため、ほ場の周囲や内部に明渠を設置し排水対策を講じる。

(4) 病害の防除

- ・長雨、日照不足等により特に低温性の病害の好適発病条件になることが予想されるため、薬剤ローテーションによる防除を実施する。

5 飼料作物

- ・収穫適期を過ぎた飼料用トウモロコシは茎葉の枯れ上がりや子実の登熟が進むことにより、サイレージの水分が低くなりカビや二次発酵が発生しやすくなるため、より細かな切断や十分な踏圧によりサイロ内の密度を高くするとともに必要に応じてサイレージ添加剤等を利用する。
- ・収穫適期を過ぎた牧草・稲ホールクroppサイレージは、乾乳末期や泌乳初期の給与量を控えるなど、給与方法に注意する。また、刈倒し後、長期間集草・梱包できずに変敗したものは、給与をしない。
- ・表作の作業遅れにより裏作（イタリアンライグラス等）の播種適期に播種できない場合は、遅くまで播種できるライ麦などに切り替える。